

〔発表要旨〕 河口慧海における社会的実践

立正大学 庄司史生

河口慧海（1866-1945）による将来文献を含む彼の旧蔵書類の一部が立正大学図書館に所蔵されていることが、近年に至り確認された。調査の結果、それらは彼の死後、彼の手元にあった文献類が同館へと間接的に寄贈されたものであることが判明した。その中には、彼が第1回入蔵時に入手した西藏蔵外文献や、所在不明となっていた梵文写本『華嚴經入法界品』（完本）、彼が所蔵していた洋装本と和装本が含まれている。

同大所蔵の河口慧海旧蔵書には、彼自身、或いは他者による書き入れが多数見受けられる。特に洋装本と和装本資料には、当該書籍の購入時期、場所、値段に関する河口慧海本人によるメモが記されているものがある。その他にも当該書籍が彼の弟子等（或いは彼と交流のあった人物等）より寄贈されたものであることを記すメモが残されているものがある。既に知られているように、彼自身の入蔵によってなされた仏典の将来、また仏典の翻訳、そして（梵）蔵漢にわたる仏典の比較対照による文献学的研究のすべてが彼一人によってなされたものではない。彼の旧蔵書類の中に見られる弟子等からの寄贈本の存在は、教育者としての彼の側面を再認識させるものといえる。要するに、河口慧海における①「仏典研究」という行為は仏教の有する教育的側面を示すものととらえることができる。

また彼の旧蔵書の中で特筆すべきものは、梵文写本『華嚴經入法界品』である。この写本は1903年に河口慧海によって将来され、その後玉代勢法雲、隈部慈明、泉芳環による解読研究の資料として用いられた。1928年に至り泉芳環により全ての謄写がなされ、この謄写本を基礎として1934年には鈴木大拙と泉芳環による校訂テキストが出版された。ただし、鈴木大拙は同校訂テキスト冒頭のノートにて、河口写本は東京帝国大学に所蔵されていたが、1923年の震災にて焼失した、と説明している。つまり同写本は2009年の再発見まで所在不明となっていたわけである。実際のところ、同写本は河口慧海の手元に戻り、彼が没するまでそこに置かれていた。河口慧海は1925年に「世界の平和に最も必要なるもの」として〈華嚴經〉の翻訳を発願している。また彼が到達した「在家仏教」の理念を記した『正眞佛教』（1936年）では、その目標として「仏国土建立」が掲げられている。彼において、仏典翻訳を含む「仏典研究」は「仏国土建立」のための手段であったといえる。要するに、河口慧海において②「仏典研究」という行為は「世界の平和」のためになされるべきものであり、そこに「社会生活における仏教の役割」が示されているととらえることができる。

本発表は、近年新たに発見された河口慧海旧蔵文献を用い、河口慧海の言動にみられる①「仏教の有する教育的側面」、②「社会生活における仏教の役割」を明らかにすることを目的とする。

<キーワード> 近代仏教学、河口慧海、『華嚴經入法界品』